漢字の接辞的用法に関する一考察（4）

——ＡＪＮ化機能をもつ漢字について——

加　納　千恵子

1．はじめに

前々稿「漢学の接辞的用法に関する一考察(2)」では，ＶＮ化機能をもつ漢字として「化」を取り上げ，その造語力について記述を試みた。また，前稿「漢字の接辞的用法に関する一考察(3)」では，Ｎ化機能をもつ漢字とみられる「諸」「全」「総」（接頭辞的用法）と「率」「式」「面」「度」「用」（接尾辞的用法），それに特に造語力の大きい「性」に焦点をしぼり，その造語のルールや用法について考察した。本稿では，ＡＪＮ化機能をもつ漢字の接辞的用法について概観し，「化」，「性」と並んで造語力の大きいといわれる「的」を取り上げ，その造語のルールについてまとめるとともに，日本語教育の立場から用法についての考察を加えることにする。

水野（1987）は，国立国語研究所の新聞調査の結果を用いて，「化」「性」「的」の用例数を数え，下のような表にまとめている[1]。

語数／接尾辞	延べ語数	異なり語数
性	592	190
化	887	251
的	3,625	681

この表を見ると，数量的には「的」の造語力が最も大きく，「化」，「性」の順になっているように見える。水野は同じ資料について，それぞれがどのような語基と結合して使われているかを調べ，「性」はＮ（体言類）の語基について使われている用例がかなり多く，ＶＮ（用言類）語基＋「化」がそれに次ぎ，「的」が最もＡＪＮ（相言類）の語基との結合の割合が低いと報告している[2]。

したがって，品詞転換機能も「的」が最も大きく，「化」，「性」の順になっているといえるだろう。

これらの漢字の造語のルールをまとめる際には，どの品詞の語基について使われるかということも大切であるが，具体的にどのような語基と結合するかという情報も，日本語教育の観点からは役に立つ。これらの漢字の接辞的用法は，初級レベルの話し言葉的な日本語を終わって，書き言葉の学習に入る際に多く遭遇せざるをえないものであり，外国人学習者にとって適切に使うことが難しいものであるといえる。たとえば，「国際的」「国際化」「国際性」のように同じ語基につくことができる場合もあるが，「機械的」「機械化」「＊機械性」や「自発的」「＊自発化」「自発性」，「＊安全的」「＊安全化」「安全性」などのように，使えたり使えなかったりする場合もある。英語を母語とする学習者であれば，形容詞を作る接辞として -tive，-al，-tic など，動詞を作る接辞として -ize，-en など，名詞を作る接辞として -ness，-ty，-ization などを知っているだろうから，これらの接辞の用法がかなり語彙的なものであることは理解できるだろう。が，もしそこに何等かのルールらしきものが発見できれば，さらに覚えやすいにちがいないのである。

2.　ＡＪＮ化機能をもつ漢字の接頭辞的用法

水野（1987）は相言化機能を持つ漢字の接辞的用法のうち，接頭辞の例として「反」「不」「未」「無」「非」「有」などをあげており，また接尾辞としては，代表的なものとして「的」をあげている[3]。

さて，上記の漢字の接頭辞的用法を，前稿までに使ってきた枠組みで表してみよう。まず「反」について用例を見てみると，次のようになる。

	結合の型	例	結合語の意味
反	<●+VN>：	反比例　反作用	～ト反対ノ動キ
	⟶VN　：		
	<●+N>　：	反政府　反革命　反体制	～ニ反対シテイルコト
	⟶N	反主流　反共産主義	～ト反対ノ立場

（反日　反米　反ソ　反共　反戦）

2字熟語としては，「反日」「反米」「反戦」などのようにNにつくものの他に，「反撃」「反論」「反抗」などのようにVにつくものもあるが，ここでは扱わない。このように見ると，「反」はＡＪＮの語基にはつかないが，品詞転換機能をもっているとは言い難い。したがって，本稿では扱わないことにする。「反社会的」のようなものは，「社会（＝N）」に「反」がついて「反社会」となったものに「的」がついたと考えるほうがよい。

次に，「不」の用例について見てみよう。「不」は，下記のようにＶＮについてＡＪＮを作る場合（①）と，Nを作る場合（②）とがある。相原（1986）は，これら行為性を示す動詞系の語に「不」「無」がついた場合，もとの語が自動詞性のものであるときはＡＪＮ，もとの語が他動詞性のときはその多くがNになる傾向があると述べている。しかし，実際には「不勉強な人」「不用意な発言」「不案内な場所」「不統一な見解」などのようにＡＪＮとして使われるものでも，「勉強（スル）」「用意（スル）」「案内（スル）」「統一（スル）」などのようにもとの語が他動詞である場合もあるし，Nになっている例のもとの語を見ても，「参加（スル）」「同意（スル）」「成功（スル）」「成立（スル）」のように自動詞的であることもある。この使い分けについては，これといった決め手がない状態である。

	結合の型	例			結合語の意味
不	<●+VN>：	不安定	不注意	不謹慎	～シテイナイ
	⟶ＡＪＮ①	不確定	不満足	不特定	
		不合格	不賛成	不相応	
		不勉強	不用意	不均衡	
		不連続	不案内	不統一	
		不徹底	不調和	不一致	
	⟶N②　：	不参加	不採用	不拡大	～シナイコト
		不干渉	不同意	不成功	
		不成立	不信任	不消化	
		不許可			

また，NについてＡＪＮを作る場合は，「～ガナイ」「～ガ悪イ」「～的デハナイ」「～デハナイ」と，意味がいくつかに分けられる。

<●+N>：→AJN	不規則	不人気	不人情	～ガナイ
	不景気	不機嫌	不都合	～ガ悪イ
	不首尾	不心得	不義理	
	不経済	不合理	不定期	～的デハナイ
	不衛生			
	不本意	不名誉		～デハナイ

AJNにつく場合は，品詞転換機能があるとはみとめられないが，用例は多い。

<●+AJN>：	不適当	不愉快	不自然	～デハナイ
	不親切	不必要	不公平	
	不自由	不確実	不可能	
	不相応	不誠実	不均等	
	不健康	不正確	不透明	
	不得意	不十分	不明瞭	
	不平等	不正直	不完全	
	不活発	不健全	不穏当	

また，「不」には「不可欠」「不可分」「不可知」「不可侵」「不可解」「不可避」などのように「不可」＋Vという構造になっているものがある。上記では，「不可能」を「不」＋「可能（AJN）」として扱ったが，本来は「不可」＋「能」とみるべきであるかもしれない。

「未」は，「未婚」「未熟」「未遂」「未定」「未完」「未踏」「未知」などのようなVにつく2字熟語を除くと，VNについてAJNを作る用例しか数がない。下のNにつく「未成年」のような用例は例外と考えたほうがよいだろう。

	結合の型	例			結合語の意味
未	<●+VN>：→AJN	未成立	未発見	未開発	マダ～シテイナイ
		未公開	未発表	未解決	
		未完成	未消化	未処置	
		未発達	未経験	未確定	

<●+N>　：　未成年　　マダ～デハナイ

しかし，「未開発」のように「未開発な分野」とも「未開発の分野」ともいえる語も実際は少なくないし，「未」は他の接辞的用法に比べると用例が少ないので，ＡＪＮ化機能は弱いと考えたほうがいいだろう。

「無」にも，ＶＮについてＡＪＮを作る場合（①）と，Ｎを作る場合（②）とがあるが，やはりその使い分けは明らかではない。Ｎにつく場合は，「無事故」「無試験」などＮを作る用例が多いのが特徴である。「無声」「無線」「無罪」「無人」「無名」「無煙」「無形」「無欲」「無色」「無職」「無害」「無休」などのような２字熟語の場合も，ほとんどがＮになる[4]。「無」にも，ＡＪＮにつく用例は見られない。また，「無」には「無遠慮」「無愛想」「無作法」のように「ぶ」と読んで，ＮについてＡＪＮを作るものもある。

	結合の型	例			結合語の意味
無	<●+ＶＮ>： →ＡＪＮ①	無関係 無理解 無意識	無感動 無防備	無抵抗 無批判	～シナイ
	→Ｎ②　：	無制限 無所属 無遅刻 無所属	無認可 無回答 無欠勤	無登録 無意識 無投票	～シナイコト
	<●+Ｎ>　： →ＡＪＮ①	無気力 無表情 無責任 無計画 無関心	無神経 無意味 無作為 無能力 無軌道	無感覚 無差別 無邪気 無秩序	～ガナイ
	→Ｎ②　：	無事故 無条件 無宗教 無期限	無試験 無趣味 無能力 無重力	無報酬 無公害 無収入 無資格	～ガナイコト

無生物　　～デハナイモノ

「非」の場合は，VNについてＡＪＮを作る用例は見られない。Nについて，ＡＪＮを作る場合（①）とNを作る場合（②）が見られるが，例は少ない。また「非」は「～的」というＡＪＮについて「～的デハナイ」という意味を表す用法が多く特徴的であるが，これらは語基の品詞的性格を変えていないので，ＡＪＮ化機能とは呼べないだろう。

	結合の型	例	結合語の意味
非	＜●＋VN＞：→N	非公開　非武装　非課税	～シナイコト
	＜●＋N＞　：→ＡＪＮ①	非常識　非合法　非公式	～（的）デハナイ
	→N②　：	非金属　非国民	～デハナイコト
	＜●＋ＡＪＮ＞：	非人間的　非科学的　非論理的 非生産的　非人道的　非合理的 非社会的　非社交的　非能率的 非現実的　非営利的　非衛生的	～（的）デハナイ

「有」は，「有意義」「有意味」のように＜●＋N＞→ＡＪＮを作る例もあるが，ごく少数なので，取り上げない。ほとんどは「有力」「有用」「有色」「有名」「有形」「有声」「有害」「有毒」「有限」「有効」「有益」「有税」「有給」「有料」「有罪」などのような2字熟語である。それらはそれぞれ，「無力」「無用」「無色」「無名」などのように「無」と反対の意味の関係にある。

さて，ここでＡＪＮ機能をもつと見なされる漢字がどのような語基について，どのような品詞転換機能をもつのかを一覧表にしてみよう。数字は本稿に取り上げた用例数，一番右の欄にはＡＪＮ化機能をもつかどうかを○×で記した。

「未」はＡＪＮと作るともNを作るとも考えられるので，ＡＪＮ化機能は△とした。用例の数からしても，造語力は他のものほど大きくない。「非」もＡＪＮ化と見られる用例数は少なく，逆にＡＪＮの語基につく例が多い。

ＡＪＮの語基につかないという意味では，「無」の品詞転換機能がはっきり

	●VN	●AJN	●ADN	●N	意味	⟶	AJN化
不	不安定 18				VNシテイナイ	→AJN①	○
	不参加 10				VNシナイコト	→N ②	×
				不規則 15	Nガナイ，etc.	→AJN	○
		不適当 24			AJNデハナイ	→AJN	×
未	未開発 12				マダVNシテイナイ	→AJN／N	△
無	無関係 7				VNシナイ	→AJN①	○
	無制限 10				VNシナイコト	→N ②	×
				無気力 14	Nガナイ	→AJN①	○
				無事故 12	Nガナイコト	→N ②	×
非	非公開 3				VNシナイコト	→N	×
				非常識 3	N(的)デハナイ	→AJN①	○
				非金属 2	Nデハナイコト	→N ②	×
		非科学的 12			AJNデハナイ	→AJN	×

している。語基の種類，用例の数から最も造語力が大きいといえるのは「不」である。しかし，どちらもAJNを作る場合とNを作る場合とがあり，そのいずれにしても，日本語を学習する外国人にとって，これらの漢字のAJN化機能が重要であるというよりは，むしろ否定的意味をもった接辞としての用法の違いの方が大きな問題であるといえよう。これらの否定辞としての用法に関しては，また改めて考察することとしたい。

3.　ＡＪＮ化機能をもつ漢字「的」の接辞的用法

初級の日常会話的な日本語から中級の日本語に進んでくると，文型表現においても，語彙においても，書き言葉的特徴が顕著になってくる。中でも「的」の頻度は急激に上がる。ここで漢字系の学習者が注意しなければならないのは，「的」の使いすぎであり，特に中国語を母語とする学習者に誤用が多くみられる。

非漢字系の学習者にとっては，意味の理解はそれほど難しくなくても，どんな時にどんな語彙に「的」が付けられるのか，というのは難しい問題である。そこで，接辞の中でも特に造語力が大きいといわれる「的」を取り上げ，その使われ方や造語上の制約などについて考察してみたい。

「的」が日本語の中でいわゆる接辞として使われたのは，明治時代の翻訳家グループによって英語の -tic の訳語として中国語から採用されたのが始まりだといわれている[5]。以後，特に翻訳に際して多用されるようになり，現在ではすっかり日本語として定着しているといってよい。

まず，今までの枠組みで「的」の用法を記述してみると以下のようになる。

結合の型	例	結合語の意味
1.　＜ＶＮ＋●＞：⟶ＡＪＮ	絶望的・同情的・狂信的 依存的・解放的・閉鎖的 進歩的・反抗的・協力的 批判的・代表的・確定的 総合的・創造的・孤立的 爆発的・楽観的・悲観的 排他的・好戦的・反日的 中立的・管理的・統一的 移動的・多発的・指向的	①～スルヨウナ
	生産的・発展的・実用的 許容的	②～デキルヨウナ
	徹底的・連続的・断続的 固定的・安定的・意識的	③～シタ／～シテイル

流動的・変動的・持続的
自立的・潜伏的

	⟶ADV	比較的	④～スレバ
2.	＜N＋●＞：⟶AJN	機械的・人間的・動物的 宗教的・絵画的・古典的 現代的・近代的・未来的 男性的・女性的・都会的 日本的・世界的・西欧的 構造的・規格的・義務的 立体的・平面的・制度的 幼児的・植物的・大陸的 海洋的・熱帯的・金属的	①～ノ／～ノヨウナ
		規則的・理論的・論理的 良心的・理性的・感情的 基本的・原則的・現実的 統計的・主観的・客観的 科学的・迷信的・法律的 計画的・感覚的・理想的 家庭的・衛生的・伝統的 習性的・儀式的・主体的 階級的	②～ニモトヅク
		社会的・大衆的・個人的 思想的・芸術的・音楽的 化学的・組織的・市場的 一般的・政治的・経済的 全体的・部分的・一時的 最終的・短期的・長期的 標準的・典型的・中心的 表面的・人格的・神経的	③～ノ

	弾力的・効果的・個性的	④～ガ　アル
	周期的・能率的・必然的	～ガ　イイ
	効率的	
3.＜N′＋●＞ ⟶ＡＪＮ ：	国際的・民主的・保守的	
	社交的・自主的・革新的	
	積極的・消極的・合理的	
	自動的・互換的・封建的	
	具体的・抽象的・自発的	
	内向的・外向的・後進的	
	先天的・後天的・独創的	
	画一的・本格的・普遍的	
4.＜ＡＤＮ＋●＞ ⟶ＡＪＮ ：	絶対的・日常的・将来的	～ニアル
	実際的	
5.＜ＡＪＮ＋●＞ ：	平和的・健康的	～ナ

ただし，結合語の意味は文脈によって必ずしも一様ではない。たとえば，「機械的」という言葉は，「卵をそのサイズによって機械的に選別していく。」という場合は「機械のように決まったやり方で」という意味になるだろうが，「飛行機の機械的雑音は人間の精神にストレスを与える。」という文では，単に「機械の雑音」という意味になる。また「彼は我々に協力的である。」という場合，「実際に協力してくれている」こともあるし，「協力するような，好意的な態度を見せている」というだけの場合もある。

「比較的」のようにＡＤＮを作るものは例外的であり，また最後のＡＪＮにつく２例もそうである。同じＡＪＮでも「平和な世界」と「平和的な解決」では，意味が微妙に違ってとおり，後者は「あまり過激でない，穏やかな」という意味である。「健康な美人」と「健康的な美人」でもやはり意味が違っている。後者は「日焼けした，元気のよい，明朗活発な」というイメージである。

ここで「的」の造語例の数と分布をみると，次のようになっている。
やはり語基はＮ（Ｎ′）とＶＮが圧倒的に多く，前の「不」「未」「無」「非」の接辞的用法と比べても，造語力が大きい。また例外２つを除いては，ＡＪＮに

	VN●	AJN●	ADN●	N●	N′ ●	⟶	AJN化
的	絶望的 43 比較的 1					→AJN ①〜③ →ADV ④	○ ×
				機械的 27 規則的 25 社会的 24 弾力的 7		→AJN ① →AJN ② →AJN ③ →AJN ④	○
					国際的 24	→AJN	○
			絶対的 4			→AJN	○
		平和的 2				→AJN	×

は「的」はつかず，ADNにつく例も限られている。

ここで，はじめに少し触れたように，「的」がつく語基が「化」「性」などと共起するかどうかをまとめておく。

VNの語基につく場合については，今まで例にあげた語基のみをまとめたので，実際にはもっと調べる必要がある。しかし，明らかに人間の具体的行為や動作をあらわすVNには，「的」も「化」も「性」もつきにくい。たとえば，「挨拶」「握手」「案内」「印刷」「運転」「演奏」「応対」などがそうである。3つとも共起する語基「孤立」「中立」「自立」や「断続」「持続」「継続」「連続」，「固定」「安定」，「流動」「変動」などを見ると，状態や属性を表わす自動詞性のVNのように見える。しかし，多くは語彙的な制約によって使える場合と使えない場合があるらしい。たとえば，「発展」は「発展的」「発展性」と言えるのに対して，同じ変化を表わすVNである「進歩」は「進歩的」しか言えないのである。さらに用例を集めて検討したい。

Nの語基の場合も語彙的なものである可能性が高いが，「的」の造語力の大きさがよくわかる。今後そこに何らかの傾向がないかどうかの検討を続けたい。

＜VNの語基につく場合＞

語基	的	化	性	語基	的	化	性	語基	的	化	性	語基	的	化	性
孤立	○	○	○	管理	○	○	×	協力	○	×	×	溶解	×	×	○
断続	○	○	○	狂信	○	×	○	批判	○	×	×	適応	×	×	○
連続	○	○	○	依存	○	×	○	代表	○	×	×	順応	×	×	○
固定	○	○	○	閉鎖	○	×	○	確定	○	×	×	吸収	×	×	○
安定	○	○	○	創造	○	×	○	徹底	○	×	×	協調	×	×	○
流動	○	○	○	排他	○	×	○	楽観	○	×	×	一貫	×	×	○
実用	○	○	○	生産	○	×	○	悲観	○	×	×	放射	×	×	○
変動	○	○	○	発展	○	×	○	好戦	○	×	×	伝染	×	×	○
中立	○	○	○	許容	○	×	○	反日	○	×	×	流行	×	×	○
統一	○	○	○	移動	○	×	○	比較	○	×	×				
持続	○	○	○	爆発	○	×	○	定着	×	○	×				
自立	○	○	○	絶望	○	×	×	硬直	×	○	×				
多発	○	○	○	同情	○	×	×	細分	×	○	×				
潜伏	○	○	○	解放	○	×	×	信頼	×	×	○				
総合	○	○	×	進歩	○	×	×	伸縮	×	×	○				
意識	○	○	×	反抗	○	×	×	感受	×	×	○				

＜Nの語基につく場合＞

語基	的	化	性	語基	的	化	性	語基	的	化	性	語基	的	化	性
現代	○	○	○	都会	○	○	×	平面	○	○	×	経済	○	×	○
近代	○	○	○	日本	○	○	×	表面	○	○	×	一時	○	×	○
規則	○	○	○	法律	○	○	×	人格	○	○	×	弾力	○	×	○
理論	○	○	○	理想	○	○	×	儀式	○	○	×	必然	○	×	○
現実	○	○	○	組織	○	○	×	西欧	○	○	×	主体	○	×	○
客観	○	○	○	全体	○	○	×	人間	○	×	○	階級	○	×	○
大衆	○	○	○	習慣	○	○	×	動物	○	×	○	植物	○	×	○
音楽	○	○	○	長期	○	○	×	宗教	○	×	○	大陸	○	×	○
一般	○	○	○	標準	○	○	×	絵画	○	×	○	海洋	○	×	○
周期	○	○	○	中心	○	○	×	未来	○	×	○	神経	○	×	○
能率	○	○	○	個性	○	○	×	論理	○	×	○	熱帯	○	×	○
効率	○	○	○	映画	○	○	×	主観	○	×	○	金属	○	×	○
構造	○	○	○	制度	○	○	×	計画	○	×	○	古典	○	×	×
幼児	○	○	○	規格	○	○	×	社会	○	×	○	世界	○	×	×
機械	○	○	×	義務	○	○	×	思想	○	×	○	良心	○	×	×
男性	○	○	×	習性	○	○	×	芸術	○	×	○	理性	○	×	×
女性	○	○	×	立体	○	○	×	市場	○	×	○	感情	○	×	×

＜Nの語基につく場合(つづき)＞

語基	的	化	性	語基	的	化	性
基本	○	×	×	脚本	×	○	×
原則	○	×	×	私物	×	○	×
統計	○	×	×	市街	×	○	×
科学	○	×	×	都市	×	○	×
迷信	○	×	×	現金	×	○	×
感覚	○	×	×	高齢	×	○	×
家庭	○	×	×	弱体	×	○	×
衛生	○	×	×	特質	×	○	×
伝統	○	×	×				
個人	○	×	×				
化学	○	×	×				
政治	○	×	×				
部分	○	×	×				
最終	○	×	×				
典型	○	×	×				
効果	○	×	×				
結果	○	×	×				

＜N′の語基につく場合＞

語基	的	化	性	語基	的	化	性
国際	○	○	○	自発	○	×	○
民主	○	○	○	内向	○	×	○
保守	○	○	○	外向	○	×	○
積極	○	○	○	後進	○	×	○
消極	○	○	○	先進	○	×	○
合理	○	○	○	先天	○	×	○
具体	○	○	○	後天	○	×	○
抽象	○	○	○	独創	○	×	○
普遍	○	○	○				
画一	○	○	○				
自動	○	○	×				
本格	○	○	×				
社交	○	×	○				
自主	○	×	○				
必然	○	×	○				
互換	○	×	○				
封建	○	×	○				

＜ADNの語基＞

語基	的	化	性
絶対	○	○	○
日常	○	○	○
実際	○	○	○
将来	○	×	○

＜ＡＪＮの語基につく場合＞

語基	的	化	性	語基	的	化	性	語基	的	化	性	語基	的	化	性
平和	○	×	×	軽量	×	○	×	無力	×	○	×	重要	×	×	○
健康	○	×	×	単純	×	○	×	透明	×	○	×	危険	×	×	○
複雑	×	○	○	正常	×	○	×	最適	×	○	×	可能	×	×	○
特殊	×	○	○	簡素	×	○	×	貧困	×	○	×	妥当	×	×	○
平等	×	○	○	強力	×	○	×	鮮明	×	○	×	特異	×	×	○
多様	×	○	○	自由	×	○	×	安全	×	×	○	残忍	×	×	○
緻密	×	○	○	深刻	×	○	×	簡潔	×	×	○				
必要	×	○	○	過疎	×	○	×	有効	×	×	○				
無限	×	○	○	明確	×	○	×	柔軟	×	×	○				

N′ の語基というのは，もともと単独で使われることはないので，他の2字熟語の前につけて使われたり，「的」をつけて使われたりするしかない。3つ全部につく場合が多いが「的」と「性」の両方につく場合も多い。また，この表には入れなかったが，「水溶性（水に溶ける性質）」「不燃性（燃えない性質）」「耐火性（火に耐える性質）」「吸湿性（湿気を吸う怠質）」などのように，意味的に分解可能な2字の組合わせからできている語基は，「性」のみに使われる用例がある[6]。

最後に，ＡＪＮの語基につく用例には，「的」「化」「性」が3つとも使えるものはない。また，日常よく使われるような「親切」「元気」「便利」「不便」「適当」「無理」「残念」などには，どれも使われない。

4. おわりに

以上，品詞転換機能をもつ漢字の接辞的用法のうち，ＡＪＮ化機能をもつ漢字，特に否定の意味をもつ接頭辞「不」「未」「無」「非」と，接尾辞「的」の造語のルールと意味について，まだ不十分ではあるが，考察してみた。今回は時間の関係でそこまでしかできなかったが，日本語教育の立場からこのような漢字の接辞的用法を考える上で重要なのは，その造語ルールや意味ばかりでなく，文中での用法を知ることである。ＡＪＮ化機能をもつといっても，できあがったＡＪＮが普通のＡＪＮと全く同じに文中で自由に使えるわけではない。たとえば，「～的なＮ」「～的にＶ／ＡＤＪ」「～的だ」のほかに，「～的Ｎ」「～的のＮ」などの用法がある場合もある。どこに使えてどこに使えないかを明かにする必要があるだろう。文中での用法に関しては，今後の課題としたい。

注

（1） 参考文献の水野（1987）p. 67 参照。新聞調査の報告は，国立国語研究所報告37（1970）『電子計算機による新聞の語彙調査』，同報告38（(971）『電子計算機による新聞の語彙調査（Ⅱ）』・同報告42（(972）『電子計算機による新聞の語彙調査（Ⅲ）』・同報告56（(976）『現代新聞の漢字』による。

（2） 水野（1987）は，「性」「化」「的」がそれぞれ，Ｎ（体言類），ＶＮ（用言類），ＡＪＮ（信言類）の語基と結合して使われている用例数と，その全用例に占める割合を次のような表にまとめている。

語構成 ＼ 語数	体言類＋性	用言類＋化	相言類＋的
延べ語数	100（16.9%）	85（ 9.6%）	194（5.3%）
異なり語数	53（27.9%）	29（11.6%）	26（3.8%）

この表のような用例は，語基に意味を添加するだけで品詞転換機能をもつとはいえない。

（3） 水野はこのほかに，「式」「流」「風」「用」「別」「製」「制」「系」「級」を相言化機能をもつ漢字としてあげているが，これらは「ナ」を伴って連体修飾成分になることがない（「ノ」を伴うか，あるいは何も伴わない）ので，本稿ではＮ* 化機能をもつ接辞の分類に入れることにする。加納（1990）では，「式」「用」などのついた言葉はそのままの形，あるいは「ノ」を伴って他のＮを修飾する用法がほとんどであり，格助詞を伴って文中に現れることが少ない特殊なＮとして，「Ｎ*」で表した。「流」「風」「別」「製」「制」「系」「級」もそれに準ずるものとして扱う。

（4） この中では，「無名」「無欲」「無害」が「ナ」を伴ってＡＪＮとして使える。
（5） 参考文献中の原（1986）p. 73 参照。
（6） 参考文献中の加納（1990b）p. 80～p. 81 参照。

参考文献

相原　林司（1686）：「不―　無―　非―　未―　」『日本語学』VOL. 5.　3月号，明治書院，pp. 67-72.

加納千恵子（1989）：「漢字の接辞的用法に関する一考察――形容詞的意味をもつ漢字の接辞的用法について――」『文藝言語研究　言語篇』第16巻，筑波大学文芸・言語学系，pp. 57-66.

加納千恵子（1990a）：「漢字の接辞的用法に関する一考察(2)――「化」の品詞転換機能について――」『文藝言語研究　言語篇』第18巻，筑波大学文芸・言語学系，pp. 69-78.

加納千恵子（1990b）：「漢字の接辞的用法に関する一考察(3)――「性」の品詞転換機能について――」『文藝言語研究　言語篇』第19巻，筑波大学文芸・言語学系，pp. 73-85.

国立国語研究所（1985）：『語彙の研究と教育（下）』日本語教育指導参考書13.

阪倉　篤義（1966）：『語構成の研究』角川書店。

野村　雅昭（1974）：「三字漢語の構造」『電子計算機による国語研究Ⅵ』国立国語研究所，pp. 37-62.

――――　（1988）：「二字漢語の構造」『日本語学』VOL 7.　5月号，明治書院，pp. 44-55.

原　由起子（1986）：「一的　――中国語との比較から――」『日本語学』VOL. 5.　5月号，明治書院，pp. 73-84.

水野　義道（1987）：「漢語系接辞の機能」『日本語学』VOL. 6.　2月号，明治書院，pp. 60-69.

辞　典

貝塚茂樹／藤野岩友／小野忍編（1986）：『角川漢和中辞典』角川書店

Jack Halpern 編（1990）：『新漢英字典』研究社

Mark Spahn/Wolfgang Hadamitzky（1989）：『漢英熟語リバース字典』日外アソシエーツ